九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドのリシャール・エイド宛未刊書簡

吉井, 亮雄
九州大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/6632407

出版情報：Stella. 41, pp.65-74, 2022-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l'Université du Kyushu
バージョン：
権利関係：

ジッドのリシャール・エイド宛未刊書簡

吉　井　亮　雄

2022年12月，ガリマール出版からジッドがスイス人出版者リシャール・エイド（1910–1959）と交わした往復書簡が公刊された（編纂・校訂者はピエール・マッソンとペーター・シュニデール）[1)]。フレート・ウーラーがヌーシャテルで興したイド・エ・カランド社の活動に加わったエイドは，ジッド作品の影響を強く受けた青年期から作家と書簡を交わしていたが，第2次大戦後には文通者からの厚い信頼のもと，次々とその著作を手掛けてゆく。じじつイド・エ・カランドは丁寧・緻密な編集にくわえ，マチスやモーリス・ブリアンション，デュノワイエ・ド・スゴンザックらの挿絵・肖像画を配した瀟洒な印刷・造本のゆえに晩年のジッドがとりわけ贔屓にした版元で，ここからは魅力的な小品『青春』を皮切りに，『帰宅』や『テセウス』第2版，『ポエティック』『序言集』『交遊録』『エロージュ』といった論集，そして全8巻の『演劇全集』，結婚生活にかんする内心の記録『今や彼女は汝のなかにあり』の私家版などがわずか数年のあいだに立て続けに上梓されるのである。またその間（かん）ジッドはエイドと職業上の肩書をこえた親交を結び，1946年と翌年の2度にわたってヌーシャテルを訪れ，彼の自宅に長逗留したほどであった。こうした交流の経緯は，随所に目配りの利いた刊本序文が見事に素描するところだが，なによりも資料体そのものの充実度が高い。ジッド＝エイド両者の往復書簡ばかりか，当該の出版活動に何らかの関わりをもった第3者との遣り取り（ウーラー，スイス人作家ラミュ，ブリアンションやスゴンザック，ジッドの著作書誌で知られるアルノルド・ナヴィルなど），また『今や彼女は汝のなかにあり』没後公刊版にまつわる未刊資料（エイドと，マルタン・デュ・ガールら故人周辺とのあいだに生じた軋轢の証言・記録など）も附載され，作家の晩年と没後の反響を知るために不可欠な素材が数多く供されているのである。

さて，この慶賀すべき出版と相前後して筆者はごく最近，刊本未収録のエイド宛ジッド書簡数通を閲覧・参照する機会をえた（いずれも個人蔵）。本稿で

は，遅ればせながらコーパスのいっそうの充実を願って，これらを若干の補説とともに紹介・提示したい。

刊本に収められたジッドのエイド宛は 40 通（ただし断片的採録少なからず）[2]，いっぽうエイドのジッド宛は 23 通と，明らかに保管状態の違いに起因する数量的な偏りがあるが，第 3 者との遣り取り 14 通を含め，すべてに通し番号が打たれ年代順に配列されている（その外には「第 2 部」として『今や彼女は汝のなかにあり』没後出版をめぐる関連書簡 10 通）。以下，本稿が示すのはエイド宛ジッド書簡 4 通（3 通が 1946 年付，1 通が 1949 年付）。内 2 通は刊本での断片的採録を補うもの，残り 2 通が今回初めて活字化するもので，後者については既刊書簡との対応関係を明確にすべく配列番号に *bis* を付す（なお，フランス語原文は稿末に一括して掲げる）。

*

1945 年 12 月中旬から，少壮作家ロベール・ルベックを伴いエジプトを旅行していたジッドは，カイロ，ルクソール，アスワンなどを経て 3 月 1 日，再びカイロに戻り，9 日にフアード 1 世大学，続いて 12 日にはリセ・フランセで講演をおこなった。また同地では前年から文通関係にあった小説家・評論家ターハー・フセインとも面会している[3]。次に掲げるのは，このカイロ滞在中にエイドに宛てて送られたハガキ（記述は表面（おもて）左半分と裏全面を占める）――

書簡 11 *bis*・ジッドのエイド宛[4]

カイロ，〔19〕46 年 3 月 10 日〔日曜〕

1 月 12 日のお手紙が昨日エジプトの私のもとに届きました。お知らせいただいた本は，私が 4 月の初めにパリに戻った時には，おそらく手にすることができるでしょう。前もってお礼申し上げます。

未発表なのは『アクアサンタ』のテクストだけだったことに気づき，困惑しています。『青春』のほうは全集の第 15 巻〔1939 年刊〕に載って未刊ではなくなっていたことを忘れていたのです。このような見落としをどうかお許しいただき，ほかにはお示しできる作品が何もなかっただけに，なんとしてもあなたのお役に立ちたかった，その気持ちだけをお汲みとりください。今回のことがご出版成功の妨げになぞなりませぬように！ 拙著出版にたいする，私の心からの感謝をお受けとりいただきたく。さようなら，いずれまた。4 月の初めにパリに戻る予定です。

アンドレ・ジッド

冒頭言及の「1 月 12 日付エイド書簡」は保存されていないが，その主題が前年

の秋に刷了していたジッドの新刊『青春』であったのは明らか。表紙にマチスの装飾模様を配したこの「花形装飾叢書」第1巻がイド・エ・カランドが手がけた最初のジッド作品となる。当初の計画では，書簡後段に挙がる『アクアサンタ』との合本になる予定だったが，結局は単独で出版されたのである。もっとも『アクアサンタ』もまた，ジッドの発言とは違って，決して未刊だったわけではない。NRF 版『ジッド全集』第15巻に先立つ1938年，『ふたつの物語』の書名を冠した極少部数の私家版（版元名を伏せてジャック・シフリンが21部のみ印刷）に件の『青春』とともに収まっていたからである[5)]。ちなみにジッドがパリに帰着するのは，結語がいう4月初めではなく，同月半ばのことであった。

3月28日にカイロを去り，ベイルートへと向かったジッドは，翌月1日にラジオ＝レバノンの放送で，次いで12日に同市内の映画館ロキシー座で「文学的回想と現今の諸問題」と題した講演をおこなう（単行書としての刷了は5月末日）。その後17日には飛行機でパリに帰着，間もなく自身の熱狂的読者であったイヴォンヌ・ダヴェを秘書として雇用している（1950年4月まで）。次に活字化するのは，その頃に発信された刊本収載書簡12の欠落部分――

書簡12・ジッドのエイド宛

パリ，〔19〕46年6月15日〔土曜〕

〔ダヴェにタイプ打ちさせた手紙に続き，ジッドの自筆で〕

たった今，6月13日のあなたの絶妙な手紙が…… ええ，本当に，何としてもあなたに再びお会いしたく……。

ル・クルトル社へのお手紙は完璧だと思います。彼らの請求書（1,473フラン）に加えて，同封の書類を受け取りましたが，私の理解が正しければ，私には980フランの負債（変な言葉をご容赦）があるということです。このような残金のことでお煩わせするのは恥ずかしく心苦しいところですが，ご親切にもあなたが，この件に係わることは必ずすべて伝えるようにとお望みでしたので。友情をこめて，あなたの

アンドレ・ジッド

追伸――上述のテクストは次の便でお送りします。

刊本のテクストは自筆の下書き（無署名）によるものだが，実際に発送された書状では，当該部分はタイプで打たれ，これにジッドの自筆記述が続いている。ただしその冒頭部が言及する6月13日付のエイド書簡は保存が確認されていない。また，第2段落の「ル・クルトル社の請求書」にかんする委細も残念ながら一切不詳。なお，追伸の「上記テクスト」とは，書簡集掲載部分に記される

ように，結局は未刊に終わった『帰宅』の第1幕（1899年執筆）[6] のほか，出版予定の同名の単行書（46年10月刊）の「厚みを増す」ために付け加えられた2つのテクスト，すなわちこのたび新規に執筆された「序文」と，ジッドがかつてオペラ台本の共作を依頼していた作曲家レイモン・ボヌール宛の未刊書簡69通（1898–1938年）のことを指す。

同じく1946年，ジッドは11月6日から月半ばまで盟友のマリア・ヴァン・リセルベルグとともにブリュッセルに滞在，同地の青年弁護士会で先述の講演「文学的回想と現今の諸問題」をおこない好評を博したが，このベルギー旅行中にエイドに宛てた次の書簡も刊本の収録からは漏れている――

書簡16 *bis*・ジッドのエイド宛[7]

ホテル・メトロポール
ブリュッセル　〔19〕46年11月8日〔金曜〕

親愛なる友エイド

11月3日付の素晴らしいお手紙は，私が荷造りをしているときに届きました。お手紙を受けて取り乱しているダヴェ女史に，心配する必要はない，ブリュッセルに着き次第，あなたに手紙でもう少しお待ち下さるようお願いするからと言いました。ご要望の情報は，私が（16日に）帰ってからでなければ差し上げることができません〔実際のパリ帰着は15日〕。ダヴェ女史があなたにあれこれ情報をお送りできるのは，私が彼女にアパルトマンへの自由な出入りを許した場合だけだからです。

『ゴロヴリョフ家〔の人々〕』〔の翻案〕を入れるならば，私自身の創作で，映画とは非常に異なる『田園交響楽』の冒頭も入れねばならぬということになりましょう。しかしそれは映画であって，戯曲ではありません。ジロドゥー〔の『演劇全集』〕に〔同者翻案による映画版〕『ランジェ公爵夫人』をお載せになるのでしょうか ??〔私が訳したタゴールの〕『アマル〔と王の手紙〕』の刊本を探してみます。

ええ，『〔法王庁の〕抜け穴』〔戯曲版〕や『〔フェヴァーシャムの〕アーデン』，『ロベール〔あるいは一般の利益〕』，そして2本の映画テキスト〔『法王庁の抜け穴』と『イザベル』〕は，あなたによって初めて出版されることになります。

〔扁桃腺の手術を受けたご次男〕パトリスのために一日も早い回復を祈り，またジャクリーヌへは愛情の花輪を送ります。匆々

アンドレ・ジッド

冒頭の「11月3日付」のエイド書簡は保存されていないが，その内容は変わらぬ友誼の表明にとどまらず，『演劇全集』を編むための資料として10月末に送られていた作品リスト（《書簡16》）に続き，さらに補足的な情報を求めるものであったはずだ。じじつジッドはパリ帰着後の18日，ダヴェとともに作品リス

トを見直し，できるだけ正確な着想・執筆の時期を確定しようと努めた旨をエイドに伝えている（《書簡 17》）。

段落を改めて言及される作品について順に補説をくわえると――。まずサルティコフ＝シチェドリンの『ゴロヴリョフ家の人々』は，ジッドが 1903 年に賛嘆しつつ読んだ作品（翌年にも再読）[8]。のちにロシア出自のジャック・シフリンとともにその翻案映画化を試みたが，実を結ぶことはなかった。次いで『田園交響楽』の映画脚本。ジャン・ドラノワが監督，ミシェル・モルガンとピエール・ブランシャールが主演した映画『田園交響楽』はまさにこの 1946 年，カンヌ映画祭に出品され見事グランプリを受賞したが，ジッドはまずは自らがシナリオを書こうとしていた。だが企ては果たせず，結局は脚本家（ピエール・ボストとジャン・オーランシュ）に執筆を委ねたのである。すなわち，ここで言及される「私自身の創作で，映画とは非常に異なる『田園交響楽』」とは，冒頭部のみで未完に終わったジッド版エスキスのことである[9]。また，前年来刊行中のジロドゥー『演劇全集』（全 16 巻）には，ジッドが指摘するようにバルザック『ランジェ公爵夫人』の翻案は収録されなかった。この全集は体裁や構成の面で，ジッド自身の『演劇全集』（全 8 巻）を編集するさいの雛形となったもの。また後者各巻の解題はエイドに委ねられたが，このことからも作家が彼に寄せていた信頼がいかに厚いものであったかが分かる[10]。次いで言及される『アマルと王の手紙』は，ジッドがタゴールの『郵便局』を仏語訳したもので，1914 年 7 月には訳稿が仕上がり，ジャック・コポーの演出で上演される予定であったが，大戦勃発によって中止。その後，同訳は 1922 年にリュシアン・ヴォージェルによる限定豪華版として上梓され（藤田嗣治（ツグハル）の木版挿絵 7 葉入り），さらに翌々年には新フランス評論社から再版されていた。

続いては第 3 段落で言及される作品――。『法王庁の抜け穴』（1914 年刊）は 1933 年にイヴォンヌ・ラルティゴーの演出により，シャンゼリゼ・スチュディオで舞台にかかり，ついで同年末には，ジッド自身の熱心な監修・指導のもと，ローザンヌの文芸愛好団体「ベル＝レットル」によって，モントルー，ローザンヌ，ジュネーヴの各地で上演されたもの[11]。エイドはこのグループに属しており，作家はそのことを長く記憶に留めていた。『フェヴァーシャムのアーデン』はジッドが 1932 年，アントナン・アルトーのために翻訳を企て，翌年夏にはその断片稿が『カイエ・デュ・シュッド』誌に掲載されたエリザベス朝の戯

曲だが，作業は以後長らく中断，1947年秋，ヌーシャテル滞在中に再開されるも，実際の完成は1950年3月まで遅れ，結果的に『演劇全集』には収録されずに終わる[12)]。いっぽうこの1949年，第6巻として出来（しゅったい）した『ロベールあるいは一般の利益』の端緒は1934年に遡る。ジッドは翌年には初稿を仕上げ，モスクワ上演も考えていたが，36年にソ連邦から帰国するとこれを破棄。その後「性格劇」に改変して完成させていたのである（44年から翌年にかけて，自身が創刊に関わったアルジェの『ラルシュ』誌に初出掲載）。なお，最後に言及される「2本の映画テクスト」については次の《書簡62》の補説に回そう。

刊本には，いくつかの出版計画とその問題点に触れた1949年4月パリ発信の書簡が採録されている。だが，おそらくは自筆稿類販売目録の抜粋に依ったためだろう，署名を欠く文面の末尾には「手紙はここで終わっている」と註記されるが，実際のオリジナルでは次のような記述が続くのである――

書簡62・ジッドのエイド宛

〔パリ，〕1949年4月13日〔水曜〕

〔第1段落中の記述「不幸なことに，私はもう何カ月も生産性のない状態が続いています。老齢にくわえて疲労が原因です。休息が必要です，もうこれ以上は無理。しかし昨日は口述用録音機（ディクタフォン）を手に入れました！」に続いて〕
どうなることやら，いずれ分かりましょう。来週の月曜か火曜にピエール・エルバールと一緒にパリを発つ予定です。数日間，休息と友情（ビュッシー夫妻とロジェ・マルタン・デュ・ガール）のニース滞在です。そしてサン＝ポールかヴァンスで『イザベル』（シナリオ）の手直しと『〔法王庁の〕抜け穴』の〔シナリオの〕完成です[13)]。
〔ラジオ対談という〕アムルーシュの大計画についてはずいぶん考えました。この計画を守るためにも，ガリマールがご親切にも持ってくる小さな話にはむやみに飛びつかぬのが肝要だと思います。ジャン・ランベールには少し伝えただけですが，大喜びのようです……[14)]。しかし，〔これについては〕いずれまたお話しいたします。
ジャクリーヌに私の優しい念（おも）いを十分に伝えていただけましたか。もう一度お伝えくださり，私に代わり彼女を抱擁していただきたく。敬具

アンドレ・ジッド

イヴォンヌ・ダヴェは，あなたがパリにご滞在中，私のあずかり知らぬ件についてですが，わずかな知らせもいただけなかったと非常に残念がっています。私は，疲れか病気，過労などのせいだろうと言っておきましたが……。

まずは冒頭に記された南仏行きと映画シナリオ2点の制作について――。ジッドはエルバールの車でマルセイユまで送られたのち，ニースへと向かい，親友

のビュッシー夫妻宅（夫シモンは作家の肖像を数点描いた画家，妻のドロシーは『狭き門』などジッド作品数点の英訳で知られるイギリス人）に滞在したが，４月下旬には重度の体調悪化により，かの地の病院でひと月ほどの療養生活を余儀なくさせられる。病状も回復した翌月末にはサン＝ポール＝ド＝ヴァンス，ついでジュアン＝レ＝パンに赴き，アメリカ人富豪で作家・文芸庇護者のフローレンス・グールド宅にしばらく逗留。翌年にかけて，２点の映画シナリオの完成を目指した。このうち『イザベル』のそれは，ピエール・エルバールとの共作のかたちで書き上げられた原稿が半世紀後の 1996 年になって活字化されている[15]。だが『法王庁の抜け穴』のほうは，すでに「笑劇（ファルス）」としての翻案が成っていたものの（1948 年刊の『演劇全集』第５巻に収載），映画シナリオの執筆はこれといった進展を見せず，捗捗（はかばか）しい結果には至らずに終わった。

最後は，ラジオ＝フランスで放送されたジャン・アムルーシュとの連続対談について――。これはジッドと親しく交わっていたアムルーシュによる企画で，1949 年の１月から６月にかけて録音されたのち，同年 10 月 10 日の初回放送を皮切りに，計 34 の連続対談が大きな反響を呼んだものである[16]。また翌年にはやはりアムルーシュによって，「多数の写真を添えた新たなインタビュー記事として外国の新聞での掲載」が企てられたが[17]，こちらのほうはジッド自身の躊躇もあって実現せずに終わっている。

刊本未収録アイテムの紹介・提示は以上だが，ジッド＝エイド間の未刊書簡は今後も競売や古書市場に現れてくると予想される。筆者としては，できるだけその機会を逃さず，微力ながらも資料体をさらに充実させる作業に協力していきたい。

註

１）*André Gide et son éditeur suisse. Correspondance avec Richard Heyd (1930-1950)*. Édition établie et présentée par Pierre Masson et Peter Schnyder, Paris : Gallimard, coll. « Les Cahiers de la NRF », Série de la Fondation des Treilles (n° 2), 2022.

２）これらのうちには，筆者が初めて活字化したジッド書簡２通（1946 年 11 月 18 日付および同年 12 月 14 日付）も採録されている。参考までにそのレフェランスを示しておくと―― André Gide, *Le Retour de l'Enfant prodigue*. Édition critique établie et présentée par Akio Yoshii, Fukuoka : Presses Universitaires du Kyushu, 1992.

p. 197；拙稿「ジッド『放蕩息子の帰宅』校訂版補遺」,『ステラ』第 24 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2005 年 12 月，174 頁。

3）フセインとの交流については次を参照―― Jean-Philippe LACHÈSE, « Taha Hussein et André Gide », *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 65, janvier 1985, pp. 59-66 ; André GIDE, « Lettres à Taha Hussein et sa famille » présntées par Claude-Moënis TAHA-HUSSEIN, *ibid.*, n° 115/116, avril-juillet 1997, pp. 145-171.

4）ハガキ表面（右半分）の宛名書きは « Monsieur Richard Heyd / Éditions Ides et Calendes / 11 rue Saint Nicolas / Neuchâtel / Suisse ».

5）Voir André GIDE, *Deux récits*, Paris : sans nom d'éditeur［Jacques Schiffrin］, 1938. ちなみに『青春』の雑誌初出は,『新フランス評論』1931 年 9 月 1 日号，369-383 頁。

6）この未完作品については，その執筆経緯や内容・主題，また「著者の知らぬ間に」自筆原稿から 7 部のみ刷られた非合法版を含む 3 つのテクストの異文を論じた次の拙稿を参照されたい――吉井亮雄「アンドレ・ジッドの『帰宅』――校訂版作成のための覚え書」,『文學研究』第 89 輯，九州大学文学部，1992 年 3 月，55-89 頁。

7）ホテル・メトロポール備付封筒の宛名書きは « Monsieur Richard Heyd / Pommier 20 / Neuchâtel / Suisse ». 使用された用箋は同ホテルのレターヘッド入り。

8）Voir André GIDE - André RUYTERS, *Correspondance (1895-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Claude MARTIN et Victor MARTIN-SCHMETS, 2 vol., Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 1990, t. I, pp. 169 et 187.

9）この未完の映画シナリオとその執筆経緯については，クロード・マルタン作成の『田園交響楽』校訂版を参照―― Éd. critique de *La Symphonie pastorale*, établie et présentée par Claude MARTIN, Paris : Lettres Modernes Minard, 1970, pp. 170-218。

10）この『演劇全集』の成り立ちについては，ジッド没後にエイドが残した次の証言を参照―― Richard HEYD, « André Gide dramaturge », *Revue de Belles-Lettres*, vol. LXXVII, n° 6, novembre-décembre 1952［parution mars 1953］, pp. 9-12.

11）Voir Irène de BONSTETTEN, « André Gide et "Belles-Lettres" », *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 61, janvier 1984, pp. 47-54.

12）この翻訳の全文は長らく未刊であったが，最近競売に付された自筆修正入りタイプ稿をもとに単行出版された―― voir *Arden de Faversham*. Traduit de l'anglais par André GIDE. Préface de Jean-Pierre PRÉVOST, Paris : Gallimard, coll. « Le Manteau d'Arlequin », 2019.

13）5 日後（4 月 18 日）のクルティウス宛書簡にも同様の旨が記されている――「私はいらつき，疲れ果て，激高した状態でパリを発ちます。おそらくピエール・エルバールとともに車で出発し，まずはニース，次いでサン＝ポールかヴァンスに赴き，そこで『〔法王庁の〕抜け穴』のシナリオを練り,『イザベル』のそれを仕上げます」（André GIDE et Ernst Robert CURTIUS, *Correspondance (1920-1950)*. Édition de Peter SCHNYDER et Juliette SOLVÈS, Paris : Classiques Garnier, coll. « Bibliothèque gidienne » n° 11, 2019, p. 277）。

14）少壮作家ジャン・ランベール（1914–1999）は 1945 年 8 月，ジッドの唯一の実子カトリーヌと結婚，1950 年代半ばまで彼女と婚姻関係にあった。作家からの信頼は厚く，その没後にはマルタン・デュ・ガール，ジャン・シュランベルジェ，ピエール・エルバールらとともに遺言執行委員会（コミテ・テスタマンテール）の一員を務めた。

15）Voir André GIDE - Pierre HERBART, *Le scénario d'« Isabelle »*. Texte établi, présenté et annoté par C. D. E. TOLTON. Paris : Lettres Modernes, coll. « Archives des Lettres Modernes » n° 264, 1996.

16）このラジオ放送は現在すべての音源がコンパクトディスクのかたちで公開されている—— André GIDE, *Entretiens avec Jean Amrouche*, 4 CD-Rom dans 2 coffrets, Paris : INA / Radio France, 1996-1997.

17）Voir [Maria VAN RYSSELBERGHE], *Les Cahiers de la Petite Dame. Notes pour l'histoire authentique d'André Gide* [éd. Claude MARTIN], Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n°s 4-7, t. IV [1977], pp. 176-177 (10 avril 1950).

Appendice :

11 *bis*. ANDRÉ GIDE À RICHARD HEYD

Le Caire, [dimanche] 10 Mars [19]46.

Votre lettre du 12 janvier m'a rejoint hier en Égypte. Sans doute trouverai-je les livres annoncés à mon retour en Paris au début d'Avril – et déjà je vous en remercie.

Confus de me rendre compte que seul le texte *Aquasanta* était inédit ; avais oublié que *Jeunesse* avait été dévirginisé par le tome XVe des O.C. Veuillez excuser cet oubli et n'y voir qu'un grand désir de vous obliger – car je n'avais aucun autre texte à vous proposer. Puisse ceci ne pas nuire trop au succès de votre publication ! pour laquelle recevez mes vœux les plus cordiaux. Au revoir – à bientôt j'espère – je pense rentrer à Paris début d'Avril.

André Gide.

12. ANDRÉ GIDE À RICHARD HEYD

Paris, [samedi] 15 juin 1946.

[*À la lettre dactylographiée par Yvonne Davet pour l'écrivain, celui-ci ajoute de sa propre main :*]

À l'instant, votre exquise lettre du 13 juin… oui, vraiment, j'ai grand désir de vous revoir…

Votre missive à MM. Le Coultre et C^{nie} me paraît parfaite. En plus de leur réclamation (1.473 fr. français) je reçois les feuilles ci-jointes qui, si je comprends bien, me tiennent pour redevable (excusez ce charabia) de 980 fr. J'ai honte et scrupule à vous importuner avec cette queue d'affaire ; mais vous avez gentiment exigé de moi la promesse de vous communiquer tout ce qui y avait trait.

Bien amicalement votre

André Gide.

P.-Sc. Vous recevrez par un prochain courrier les textes susdits.

16 *bis*. ANDRÉ GIDE À RICHARD HEYD

Hôtel Métrople
Bruxelles

[Vendredi] 8 Nov[embre 19]46.

Cher ami Heyd,

Votre excellente du 3 Nov[embre] m'est parvenue tandis que je pliais bagages. J'ai dit à Mme Davet, qui s'affolait au reçu de votre lettre, qu'elle n'avait pas à s'en faire et que je vous écrirais, sitôt à Bruxelles, pour vous prier de patienter un peu. Je ne pourrai vous donner les renseignements demandés, qu'à mon retour (le 16). Mme Davet ne serait à même de vous en envoyer certains que si je lui laissais libre entrée dans mon appartement ; je préfère pas.

Si vous donnez [*Les Messieurs*] *Golovleff*, il faudrait donner aussi le début de *La Symphonie pastorale*, de mon cru et très différent du film. Mais c'est du cinéma, non du théâtre. Donnez-vous *La Duchesse de Langeais* dans le Giraudoux ?? Je tâcherai de retrouver un exemplaire d'*Amal* [*et la lettre du Roi*].

Oui : *Les Caves* [*du Vatican*], *Arden* [*de Faversham*], *Robert* [*ou l'Intérêt général*] et les textes des deux films, paraîtront chez vous pour la 1ère fois.

Mes vœux pour le prompt rétablissement de Patrice et des gerbes d'affectueux souvenirs pour Jacqueline. Votre

André Gide.

62. ANDRÉ GIDE À RICHARD HEYD

[Paris, mercredi, 13 avril 1949.]

[*À la suite des lignes suivantes dans le premier paragraphe :* « Besoin urgent de repos ; *je n'en peux plus*. Mais hier, je me suis offert un dictaphone !!! », *Gide continue :*]
Nous allons voir ce que ça donnera. Je compte quitter Paris lundi ou mardi prochain avec Pierre Herbart. Quelques jours de repos et d'amitié (les Bussy et R[oger] M[artin] du G[ard]) à Nice, puis Saint-Paul ou Vence, pour la mise au point d'*Isabelle* (scénario) et confection des *Caves* [*des Vatican*].

Beaucoup pensé un vaste projet d'Amrouche. C'est aussi pour le protéger qu'il me paraît important de ne point abuser de la gentillesse de Gallimard au sujet de menu fretin. Le peu que j'en ai dit à Jean L[ambert] semble le ravir… Mais je vous en reparlerai.

Aurez-vous redit à Jacqueline de suffisantes gentillesses ? Recommencez et embrassez-la derechef de ma part. Tout amicalement votre

André Gide.

Y[vonne] Davet s'affecte de n'avoir pas reçu de vous le moindre signe de… je ne sais quoi, lors de votre séjour à Paris. J'ai argüé : fatigue, maladie, suroccupation, etc…